Title	感染教育とキリスト教教育 ： 折口信夫から八木重吉へ
Author(s)	濱田，辰雄
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.12, 1998.3 : 150-193
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3450
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

感染教育とキリスト教教育

――折口信夫から八木重吉へ――

濱田　辰雄

序

キリスト教はそのはじめから「教育」を重んじてきた。その前身であるユダヤ教が子弟の信仰教育に熱心であることの影響を受けて、やはりキリスト教徒の子弟の信仰教育に熱心であった。また成人においても正しい信仰を身につけるために「教育」は熱心に行われた。教会が出発した時の記事にある「一同はひたすら使徒たちの教を守り」（使徒行伝二章四二節）やキリストが弟子たちに言われた「あなたがたは行ってすべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」（マタイ福音書二八章一九～二〇節）などにその証しを見ることができる。

困難がありながらも伝道が地中海世界に進展していた時代が過ぎて、ローマ帝国からの強い迫害を受けて地下にこもらざるを得なくなった時代、すなわちおおっぴらに伝道ができなくなった時代は、信仰者の子弟への教育は唯一の伝道

活動でもあった。キリスト教が公認されてからも、教会はなお教会員の子弟への教育を熱心に行った。特にローマ・カトリック教会では、教会員に子どもが生まれるとほどなく幼児洗礼を施し、ミドルティーンに堅信礼を執り行なうまでの期間、いわゆる「カテキズム（公教要理）教育」を行ったのである。これは今に至るまで続けられており、カトリック教会の重要な伝道方策の一つとなっている。また宗教改革時代には、改革者ルターによるドイツ語聖書翻訳によってプロテスタント教会の信仰教育と伝道が大いに進展した。以来、世界伝道は、国語による聖書翻訳事業が欠かせないこととなった。また近代に入り、一七八〇年にロバート・レイクスによってイギリスで初めて「日曜学校」が始められた。これは貧しくて学校に行けない子どもたちへの教育を受け持った慈善学校の性格が強いものであったが、その影響力は強く急速に発展していった。日曜日の午前から午後にかけて六時間以上も開かれ、礼拝やカテキズムなどの宗教教育はもちろん、一般初等教育、特に字を読む教育が行われたのである。この日曜日学校がアメリカに伝わっていって純粋に教会の教育事業となり、日本の教育はこの形を受容したのである。

さて、時代が下がって日本へキリスト教が伝えられた時、外国ミッションは教会を建てると同時に多くのキリスト教学校・ミッションスクールを建てた。教会を通しての直接伝道と、学校教育を通しての間接伝道と二種類の伝道活動を基軸としたのである。爾来百数十年、幾多の変遷を経ながらも、教会と学校がキリスト教伝道の基軸であることには今も変わりがない。しかし「学校」の側で大きな変化が生じていることも事実である。それは、「教育を通しての間接伝道」から、「教育のみの機関」という性格が強くなってきているのである。教育と伝道との分離が起こっている。「キリスト教教育」の領域もせばめられている。

一方、教会の側であるが、かつては伝道を第一としながらも、信徒訓練・信仰者の子弟の教育も熱心にやってきた。しかしいつの頃からか、信仰は本人の自由意志によるという主張のもとに信仰者の家庭での信仰教育が希薄になってきた。教会内でも一向に進展しない伝道に心血を注ぐあまり、信仰の教育・学びには仲々手が回らないという状況になってきている。信徒たちもこの世の動きの速さに巻き込まれて教育という時間と手間のかかる事柄に専心できなくなっており、さらに全体的な世俗化という状況も手伝って、しかるべき教育が行われなくなっている。キリスト教教育・信仰教育は危機に瀕しているというのが論者の現状認識である。

さて、こういう状況にあって、論者は、日本の神道学者・民俗学者、歌人としても名高い折口信夫の教育論に注目している。といっても折口信夫が特に「教育論」と銘打って何事かを主張しているわけではない。ただ折口が国文学、神道について論じているなかで時折出てくる「感染教育」という言葉に興味をひかれたのである。ここにもしかしたら日本のキリスト教教育を考える一つのヒントがあるかもしれないと思ったのである。

それゆえ本論では日本におけるキリスト教教育の行く末を見ながら、それを折口信夫の「感染教育論」を手がかりとして論じていくこととする。第一章では折口信夫の感染教育論を紹介し、第二章で聖書における霊と言語との関わりを整理してとりあげ、第三章で日本におけるキリスト教教育の課題について私見を述べることとする。

なお折口信夫の引用は中公文庫版全集（一九七五年～一九七六年）を用い、聖書の引用は口語訳（日本聖書協会、一九五五年）を用いる。また八木重吉の詩は『定本八木重吉詩集』（彌生書房）から引用した。

第一章　折口信夫の「感染教育」論

折口の愛弟子岡野弘彦氏が『文學界』に連載しておられた「折口信夫の記」第十一回（一九九六年四月）、最終回（同年五月）に折口の「感染教育」についてふれておられる。折口の弟子たちへの教育、特にその同性愛的志向について述べておられる中での文章であるが、このように書いておられる

折口はその古代学の問題の中で、歌や物語による魂の感染教育について話すことがあった。わかりやすい例として平安朝の貴族社会の例をあげることが多かったが、何もその時代の貴族ばかりではない。古代の日本人にとって歌や物語は、それを歌い、語ることによって、歌や物語の中に宿りこめられている魂が発動し、移るべき相手の体に宿るのであった。

（中略）語りの姥から口うつしに、力ある歌や物語にこもるさとりの力を直接受けとるのであって、姥に力があって教育するわけではない。（中略）古代人にとってもっとも大切な「やまと魂」はこうした感染教育によって附与され、ただの知識を身につける漢才の教育とは別のものであった。

岡野氏は、さらに山本健吉氏が『いのちとかたち――日本美の源を探る』でこの折口の感染教育にふれて、折口も弟子たちへこの感染教育を施したと推察していることを紹介している。山本健吉氏も折口の弟子の一人である。山本氏は『いのちとかたち』の第七章「魂の女教育者たち」で古代貴族階級でおこなわれて教育法について述べている。山本氏

が「後拾遺集巻二十、誹諧歌の赤染衛門の歌を紹介しながら、たとえ知的教養がない乳母であっても「たましい」の教育は歌および歌物語を読み聴かせることによって立派に出来ていたことを詳述している。また後白河院が『梁塵秘抄』で用いている「写瓶」という言葉を借りてやはり感染教育が江戸以前にかなり浸透していたことを述べている。

また岡野氏は、折口が特に愛した伊勢清志・鈴木金太郎・藤井春洋などに寄せた教育はまさしくこの感染教育であったと言うのである。

長い時をかけ、同じ生活律の中でじっくりと感化を与え、広く深い折口の学問と文学の上にみちびき出される伝統的な価値感と結びついた感染教育によって胸に沁み透らせてゆく薫育である。（「折口信夫の記」最終回）

岡野氏や山本氏がこれほど影響を受けた折口の言う「感染教育」の「感染」とはどのようなものか、それをこれから見ていきたいと思う。

第一節　折口信夫の「霊魂」理解

折口が言う「感染教育」の「感染」とは一体何を感染させるのであろうか。それはもちろん「たましい＝霊魂」である。なぜ「たましい」なのか。まずは折口の「霊魂」理解から見てみよう。

折口は飽くことなく「日本文学の発生」を問いつづけた学者である。その探究の到達点は、日本文学の発生は、「神霊」によるというものであった。昭和二二年の『人間』一月号から四月号に寄稿した「日本文学の発生」で折口はこう書いている。

傳承する習俗と把持する意力とが先祖の心になかつたら、吾々の先祖は、何も神に報謝する爲に、神に詞を傳へようとしたのではない。神の威力の永續を希うて、其咒力ある詞章を傳へ遺（オト）すまい、と努力して來たのであった。……神が神としての靈威を發揮するには、神の形骸に、威靈を操置する授靈者が居るものと考へた。（中略）形骸に靈魂を結合させると、形骸は肉體として活力を持つやうになり、靈魂はその中で育つのである。さうして其靈魂は、肉體を發育させる――さう言ふ風な信仰が、更に鎭魂（タマフリ）の技術を發達させることになったのである。だから産靈（ムスビ）は信仰で、鎭魂は咒術といふことになる。（中略）

此地上に於いて、聖なる御子の神言を發せられる際は、其が傳達の意味であることは勿論だが、やはり、さうした咒術者が身邊に居て、威靈を結合させる。さうすると、天上の神に現れた様に、威力ある詞が聖なる御子によって發せられるやうになる、と考へたのが、次には、神語を發する神でなく、神語の威靈を考へたのである。此信仰が展開して、言靈信仰が現れて來ることになる。

（全集第七巻　一〇八～一一〇頁）

この叙述の中にすでに「感染教育」の骨格があらわれているのであるが、とにかく日本文学の発生は神語にあり、その神語を傳達するということは神語にある威靈を授受することとされている。折口にとって、霊魂の第一義は神霊であって、その神霊によって国々とそこに住まう人々は生かされるのである。このように神霊が言語（歌・咒詞）によって授受されるか否かは死活問題だったのである。この構造を示す叙述を以下に三ヶ所引用させていただく。いささか長くなるが御寛恕いただきたい。

まづ、日本の文學は、後世の宗教文學がさうであった様に、發生期のものも、宗教的な目的の爲に、滅亡しない用

意として、神に對する人間の義務として、明確な記憶の上に置かれてゐた。つまり、神が、日本の中の國々に現れて、國土の民に與へたと信ぜられる權威ある章詞、即ち呪詞――まじつくの詞・唱へ詞――であつた。神の威力あるたましひが、この呪詞の上に宿つてゐる爲に、壓倒的な勢力をもつて、神や神に信頼する國土の人の欲望を妨げる、邪惡な精靈を慴狀させるものと、信じて疑はなかつた。その信仰から、これを傳誦して、常に發言して、その威力を發揮させてゐたその呪詞が、次第に數を增して、色々な場合の、呪的効果を持つ事になつたそしてそれは、神と精靈との過去の約束を、思ひださせるものだから、――おそらく、過去表現によらず、現在發想をとつておつたであらうけれど――歷史的な印象を與へる、詞章だつたものと思われる。そこに呪詞であると同時に、歷史的な内容を持つた、敍事詩の傾向を含んでゐた。そして、そのあるものは、敍事詩傾向が著しくなり、あるものは、單なる呪詞としてとゞまつたものと思はれる。

（全集第十四巻　六頁）

歌物語は、國風から考へねばならぬ。日本の國では、不思議な信仰を持つて居る。即、唱へ言をすると、對手が屈伏すると同樣に、歌をうたふと、魂が自由になると考へた。つまり、魂が歌にくつゝいて居る、歌に魂が流動して居ると考へてゐた。その著しい例が、くにぶり・くにぶり歌である。國風は、大和の國なら、大和の歌があり、山城の國なら、山城の歌がある。その國の魂が、その歌によつて左右せられる。此歌を歌ひかけると、歌ひかけられた人に、その魂が働きかけるといふのが、日本の昔の風習であつた。土地を領するには、土地の魂が必要である。日本の國を治めるには、まづ大和の魂を有する事で、群臣の魂を天皇にふらねばならぬ。この魂ふりの行事が、毎年行はれた。賀詞がこれである。まづ天皇は、大和の國の魂を著けねばならぬ。その他は皆、天皇に國々の魂を奉

る。すると始めて天皇は、その國を治める事が出來る。その方法は、賀詞と歌との二つである。（中略）國風とは、國の魂、國々村々の魂を、天皇の御體にふらしめる、即、國魂をふる時の歌を言ふ。これがふりである。

（全集第十巻　一六六～一六七頁）

ふりの最初は、土地々々の魂ふりの歌といふ事である。日本の國では、天皇に、常に國々の歌・村々の歌が奉られた。仁徳天皇の時に、始めて吉野の山中の國栖が出て來て、天皇に治められる様になつた。もつと古い國々で見ると、主基の國・悠紀の國で、風俗と言ふものを歌ふ。近代では、都の歌人が作る事になつてゐるが、中央の歌人が作つたのでは、意味をなさない。その土地、その村々から、涌き起こる様に出來上がつたものでなければならない。天皇に主基の國の歌を歌ふ時、主基に國の魂が附加し、悠紀の國の歌を歌ふ時に、悠紀の國の魂が附加する。主基・悠紀はつまるところ、天皇の領地を二つに分けて、それを代表させたものである。だから天皇は、これによつて、日本國中の魂が附加して、日本國中を治める權威を持つ事になる。

（全集第十巻　一六七～一六八頁）

折口によれば、ある土地・国を支配するには、まずその土地・国の霊を支配せねばならず、そのために歌が用いられたのである。歌うたう時、その歌の霊（神霊）が授受されることによって相手の霊を屈服させ、支配することが出来たのである。このテーマのバリエーションが『大嘗祭の本義』にあらわれた「天皇霊」の授受・継承ということである。いずれにしてもこの日本では土地や人の背後にそれぞれの霊魂があるのであり、歌がその霊魂の支配に決定的な力を持っているのである。これはただ古代のことというのではなくて折口は死にいたるまでこのように信じていたはずである。この霊魂理解を根として折口の感染教育論は成立している。

第二節　折口信夫の「感染教育」論

まず折口が「感染教育論」について語っている典型的な個所を見てみよう。

沖縄の中には古代の生活が、そのまゝ殘つてゐる。百年程前、尚家の祖先、即、首里の國王の宮廷では、國王を教育する設備は無かつた。國王は最尊い賢い方であるが故に、臣下が教へる事は出來ない。臣下は漢學をやり、内地の源氏物語・伊勢物語を學んで居たが、國王に教へる事は出來なかった。世が進んで來ると、この觀念がなくなつて來る。この事實は、日本にも嘗てはあつた。天皇に教へる事は、臣下として、恐れて誰も敢てしなかつた。處が一方に、一の教育法を有してゐた。それは、貴族の子弟の教育にも用ゐられてゐた。それは、物語を語り聞かせ、歌い聞かせる事で、そのかたり歌ひしてゐる間に、相手の心の中に、魂をふり、その魂を變化して行つた。結果から見ると、明らかに教育ではあるが、教育意識を有しない感染教育である。この教育法が、日本では、尠くとも平安朝の中頃まで行なはれてゐた。その色彩が薄くなつて、始めて教育する事が出來た。本道の意味の教育法が行はれ出したのは、漢學の力である。漢學によつて成立した本道の教育法が、貴族教育の方面へ割り込んで來た。平安朝の初期から、貴族は漢學に教育せられ、日本風の教育を授けられる時には、感染教育を用ゐ、この力によつて魂が變化して行つた。

（全集第十巻　一七一頁）

ここになぜ折口が「感染」という言葉を用いたかが明瞭に示されている。日本の教育で一番大事なのは天皇の教育である。天皇がしっかりと立つことなくして日本国は立ちゆかない。それゆえいかにしても「天皇霊」「やまと魂」をし

っかりと身につけてもらわねばならない。しかしそれを臣下の者が天皇に向かって教育するわけにはいかない。それゆえ教育係の働きによって気づくとはなしに大和魂を乗り移らせなければならない。それはまさしく「感染」である。折口はそもそも「大和魂は、教へる事によって、附著するものではない」とさえ言っている。感染させる以外に天皇教育は成り立たず、それがやがて貴族階級一般の教育にまで応用されていったのである。

平安時代に、物語乃至歌物語が發達したのは、感染教育が、その根本教育をなした結果である。教育ではあり乍ら、教育目的を有せざる一種の教育方便に、魂ふりが使用せられた。その爲に、歌物語・物語を聞かせ、過去に於ける、あらゆる知識を授けると共に、世の中に必要とする力量をもたしめようとした。これが、平安朝時代に於ける歌物語・物語の降盛の導きをなしたのである。王族、貴族の子弟に、物語を聞かしめる語部があつた。敍事詩が物語であつて、それを語る者が語部である。昔の物語を聞いてゐると、物語の中の魂が躍動して、聞く人の心の中へ附著して了ふ。敍事詩・物語の中に歌がある。この歌のみが、遊離して使用せられる事がある。この歌が、特殊な働きをする。貴い敍事詩の中に納まつてゐる歌を聞かせると、物語全體としての効果が發生する。貴族の子弟は、出來るだけ歌を覺えようとした。歌が教育であつた。

（全集第十巻　一七二～一七三頁）

以上を要約して言えば、次の折口の言葉にあるように感染教育とは、言葉に感染させることによって、（神）霊をやどらせることなのだ。この教育によって日本の神の霊は宮廷生活の中に受け継がれてきたというわけなのである。

古くから傳承してゐる詞句には、國のすぴりっとが宿つてゐる――國の威力が籠つてゐると信じた。だから其國の重要な位置にある人は、必、之を受け傳へなければ、威力がなくなつて了ふ。その爲に、どうしても、この古詞章

は覺えなければならなかつたのだ。かうして傳承されたものがことわざは、大抵は、もとは讃詞（ホメコトバ）である。讃詞は、現狀を讃美するのが本旨ではなくて、さうなつてくれゝばいゝといふことを、相手たるすぴりつとに言ひ聞かせる、すると精靈は、其發せられた詞章に責任を感ずる——客觀的に言へば、言葉の威力によつて、相手をちやーむさせる——即、言葉に感染させることだ。

（全集第十九巻　二〇〇頁）

このように見てくると、どうしても歌と霊魂との関わりを見ておかなければならない。なぜ歌によって感染教育が行なわれるのだろうか。折口はそれを次のように端的に説明している。

歌は一つの民俗として發達して來たのですから、民間傳承のうちに文學となつて來ました。歌は面白いからではなく、魂を貯藏出來るものと思はれて傳承されたのです。其樣な信仰をもつて傳へたから、ほろびなかつたのです。

（全集第九巻　五五一頁）

そこで、歌うたふ最根本の目的を考へてみると、その目的は唯一つ、即魂を身につける、その爲の手段として歌はれたのである。

（全集第十巻　四七六頁）

歌は魂の貯蔵庫であり、魂を身につけるために歌はうたわれたというのである。折口が説いた種々の「日本文学の発生」の議論からして当然の帰結である。祝詞や呪詞も同様である。『聲樂と文學と』で「大倭六御縣の神を祀る祝詞」についてこのように言っている。この神は大倭京からのちに山城京へ遷り、祝詞もその時分から唱えられていたのだが、その詞章から見て間違いなくすでに大倭京時代から長く諷誦せられてきたものであると断定できる。しかしこの祝詞は平安京では山城における御料地の神々に寄せた詞章として伝達されることになったのである。

其は、かう言ふことになるのである。内容は早く變つて居るに繫らず、詞章は依然として舊いものが用ゐられて居た。此には、色々な説明は出來る。併、要するに、咒詞の威力が、何物よりも強かつたことを示してゐる訣である。咒詞の前には、個々の地上の神々は、無条件に詞章の表現どほりの性質を持たねばならなかつた。大倭六懸の神の爲の咒詞を聞かされる神々は、其が、山城の園池の神々であると共に、殆最初から、六縣の神々だつた樣に、心からさうだつたものと考へたのである。偉大な言語の力に、感染するのである。

勿論言語の威力によるものではあるが、其詞章を發言した偉大な神、或は、神なる人の靈力のこもつたものとしての言語の力なのであつた。だから固よりその言語は力がある。併、その底に充ちた神の靈が、力の源である。咒詞の個々の詞章は、勿論崇むべきものだが、其裏に張りついたやうになつて存して居る偉大な靈力は、更に尊かつた。咒詞の信仰の、殆絶對的に保たれてゐる間にも、此根本事實は、忘却しては居なかつた。傳來の詞章の中にあるもの、――其は、咒詞を唱へてゐる時に、發動するものでなければならぬ。咒詞の命は單に記憶せられ羅列せられた無生命の言語群の上にはなかつた。之が唱へられる時、言語と聲音との間に發動するものこそ、詞章自身の命なのである。聲音の連續、さうして其が、脈搏を見せるやうに起る所の抑揚、其間に絶えず伸び縮みする音調、――此聲樂要素とも言ふべきものが、咒詞々章の根柢に横はる真實のものである。　（全集第七巻　二三七～二三八頁）

偉大な言語の力、その底に充ちた神の靈、それが感染力の源であり、その感染こそ次代の教育の最肝要事である。ここまでくれば当然もう一つふれておかねばならぬことがある。それは「言霊」についてである。折口のその考えは先の叙述ですでにあらわれていることであるが、つけ加えて述べておく。要約すれば、言葉の中に霊がひそんでいて、その

言葉を発するとその霊が働き出す、というものである。その意味で日本は「言霊幸はふ国」というのである。

つまり、言語精霊が不思議な作用を表わすといふことが、言霊のさきはうといふ意味です。さういふ言語が、古代の日本の國に傳つて居て、それを忘れてはいけないといふので、一所懸命に失はないやうに傳承して居たのです。そしてそれが日本の文學の始まりとなつた訣です。（中略）常に使つて居る意味は、語の中に一種の魂――語のすぴりつと、言語精霊といふもの――が潜んで居て、その語を唱へると其精霊が働き出す、かう考へて居たのです。單なる名詞を口誦んだ所で、それは何も働かないが、昔から傳つて居ると考へられて居る一つの文章を唱へると、其詞章の中に潜んで居る一種霊的な精神が、それを唱へかけられた人に働きかけるのです。

（全集第一七巻　一四四～一四五頁）

この言霊信仰があって、歌・祝詞・咒詞が霊力・霊威を持ち、それが感染教育へとつながるのである。この「言語精霊」と歌の働きについて別に次のようにも語られる。それは神自らが人にささやくようにして告げ授けてくれたもの、というのである。

日本では、歌は神様が授けてくれるもの――神が人間の耳へ、口をあてゝ囁くように告げてくれる。其歌をば、われ〳〵が感じてゐるといふことだつたので、どこからか歌が起こつてきて、われわれの心に觸れるものと思つて居たのです。「いつでも歌はう」と言ふ構へであれば、そこに意味がある歌がくつゝいてくる。さう思つて、始終くり返してゐたのが、短歌の制作動機の成立過程だつたのです。だから記・紀は勿論、萬葉の古歌には内容のない歌が澤山あるのです。（中略）たとへば雪―雪が降つてゐる。其を手に握つて、きゆつと握りしめると、水になつて

手の股から消えてしまふ。其が短歌の詩らしい點だつたのです。處が外の詩ですと、握つたら、あとに殘るものがない筈はない。つまり、さうでなければ思想もない、内容もないといふことになる。古風の短歌は握りしめてしまへばみな消えてしまつた。何も殘らない。さう言ふのが恐らく理想的なものとなつてゐる筈の短歌に、右に言つたやうな内容があり、思想がある訣はないのです。つまり神が日本人の耳に口をあて、告げた話――それが受繼ぐことが出來れば、其で神の人間に與へた悲しみも、愉しみも、十分に傳へ得たと安んじて來たのでせう。意味が訣つても、訣らなくとも、神の語は音樂として人の胸に沁むとせられたものなのです。宗教的の實際の用途から、歌といふものを考へて、さういふ風に取り扱つて來たものです。ですから非常に單純に、簡單に目的を達することが出來たものなのです。

（全集第二七巻二三三～二三四頁）

ここで言っているのは、言語の意味・思想内容よりも、その言語が発せられた最初の神の息吹（言語精霊）が伝えられること、それが一番肝要なことであり、歌や呪詞はその伝達手段として機能してきたということである。言語の意味・思想内容を伝えるのならば、教育者に明確な教育意識と知識がなければならぬ。しかしそうではなく、「きゆつと握りしめると、水になつて手の股から消えてしまふ」ような世界を伝えるのは、まさしく「感染」以外にはない。古代の教育者はそのための修練を歌を通してなしてきたのである。

また短歌に関してこのようにも言っている。

短歌はわれわれの生活を吸収したり敷衍したりして、其に一つの思想を形づくる。其思想が、――思想と言ふより、情調――氣分なのです。其點で短歌は單純なものになり得るのです。同時に短歌といふものは、殆ひろがりを持た

ずに消えてしまふやうな傾きがあるのです。此は短歌の情調性によるものです。　（全集第二七巻　二三七頁）

これは折口の若い時からの発想を根にした考えである。折口は國学院大學の卒業論文に「言語情調論」というものを書いている。この論文は難解で論者が扱うには力を越えたことであるが、恐らくは言語の成り立ちも言語の伝達も「情調」が基となっているという主張と思われる。この「情調」というのが難しいのだが、「霊」と結びついているのは間違いないであろう。

この霊としての情調こそが日本の魂、生命であるというのが折口の信念、いや信仰なのである。これを承け継がずして次代の日本はない。感染教育の発生は天皇教育であり、平安からの貴族教育であるが、これを自分の弟子たちにも施してゆくのが自分の使命であると確信していたのである。

第三節　折口信夫、もう一つの教育論

大正十四年の五月に『教育論叢』という雑誌に、折口は「新しい國語教育の方角」という文章を寄せている。そこに「個性」について書いてある部分があるのだが、その主張は斬新で、とても七十年前のものとは思われない。そこでの主張は、教育者がよく口にする児童の個性尊重というのに対して、真に心すべきことは先生・教育者の個性であるというのである。それが忘れ去られた現状に折口は嘆いているのである。

私は、教育家の口から、兒童生徒の個性尊重の話を聞く度に、今日の教育の救はれないものに成つた理由を痛感します。教育と宗教とは別物でありますけれども、少くとも宗教に似た心に立つた場合に限つて、訓練も知育も理想

的に現れるのだと考へます。この情熱がなくては、教授法も、教育學も、意味が失はれてまゐりませう。生徒、兒童の個性を開發するものは、生徒兒童の個性ではなくて、教育者の個性でなければなりません。たとへば、優れた藝術家が、一人でも先輩或いは、周圍の影響を受けないで、偉大な個性に目醒めたといふ例がありませうか。教育は畢竟、個性を芽生えさせる所に意味がある筈です。併しその上に、その個性に、ある進路を與へることがなくては、教育者自身の存在は意味がなくなります。強い言ひ表わし方をすれば、教育は、個性を以つて個性を征服するところに、真の意義があるのです。謂はゞ、個性の戰爭であるのです。世の中に固定を恐るべきものは、教育家が第一であると致さねばなりません。一歩停まれば、被教育者から殺されるものとの覺悟がいります。だから、常に足を止めることが出來ないのです。

（全集第十九巻　二二～二三頁）

教育の問題は、一にも二にも「教育者の個性」の問題であるというのが折口の信念である。教育者の個性とは、本人の実存そのものであって、給料を得るための労働というところからは決して生まれ出ないものである。そこに教育者は生命を賭けるべきであって、その個性から発する影響こそが生徒を教育するのである。教育者は他の教育者と安易に協調するよりは、かえって互いの影響力の強さを競い合う方が本筋だと折口は考える。それほど教育者は己れを厳しく研磨、鍛練すべきなのである。

神授の物を授けてはならないと言つて、舊信仰の忘れ形身の様な個性尊重説の下に動きのとれなくなつてゐる教育家は、實は自身の個性に信頼が出來ないのです。自身侮り、卑下して居て、個性の戰爭などに思ひの及ぶはずもありません。教育は職業になりました。合同作業になりました。被教育者の個性の征服は勿論、教育者同士の間にも、

もつと妥協態度を棄てる必要がありはしませんか。お互の教育効果を減殺する事を氣にするより先に、影響の強さを競ふつもりになつて欲しいものです。競爭の成心なく、自然に揉み合ひ、凌ぎあひの行はれるのを理想とします。國語教育を受け持つ者が、何の爲に英語や、數學や博物の教師と協調して行く必要がありませう。思う存分に力を伸べてこそ、真の效果は生じるのです。被教育者の能力は、教育者の空想する程貧弱なものではありません。各學科その效果を爭ふ必要があります。國語科の先生は、常に、不生産的な學科だと言つた自覺に尻ごみして、けなされ勝ちになつて居ます。此は教育の目的を、功利的に考へてゐるからの自卑です。どうもやつぱり、讀み書きに國語教育の本旨があると考へる人が多い様なのは困ります。

（全集第十九巻　二三頁）

何よりも教育者の個性を重要視する思想はさらに次のような展開を見せていく。それは、学問の進歩はまず優れた突出した個性が登場してきて、それまでの水準を一挙に高める。次にその才能を一般の平均的なレベルの者が食らいついて、天才によって一旦高められた水準をまた低くしてしまう。しかしそれでも天才が登場する以前に比べるとやはり全体として水準は上がっている。このように全体の学問の水準を上げるためにどうしても突出した優れた個性が登場しなければならない。教育者たるものは、被教育者の水準を上げるためにどうしても強く影響力をもった個性であることを心がけなければならないということになるのである。以下は「日本文學研究法序説」（昭和二六年三月）からの引用である。

優れた個性が、世間の文學を飛躍させると同時に、世間に對しては、今までよりも高い普遍性を將來する事になる。文學が世にあることの根本義も、實は普遍性を高める所にあるのだ。文學を高めるばかりでなく、生活全面に渉つ

て、高い普遍性を與へる爲である。だが、能才の出現は、さう言ふ風にして見れば、非常に意味のある事なのだが、事實は極めて平凡化せられた姿を示すことがある。

（全集第七巻　四八〇頁）

現實は常に能才の爲事も、時代を僅かにしか飛躍させてゐない。それでも此人々が出た事の效果を示すやうに、確かに一段高い普遍化が次いで來てゐる。もともと平凡化するのが常人のことなのだから、そこに常人と、能才との相混つてゆく世の中の、意味はあるのである。どうかすれば、能才の文學の孤立した高さに心奪はれて、我々は、常凡な群衆の文學を省みまいとするけれど、かう言ふ風に見てゆく以上は、常人が如何に能才の出なければならぬやうに必至の機運をつくり、能才の爲事を我々の生活に合致するやうに、常凡化してゆくかと言ふ事を、觀察してゆく事が大切である。

（全集第七巻　四二八頁）

折口は、恐らく死にものぐるいで「能才」であろうとしたに違いない。しかしそれは自賛のためではなく、弟子たちに必至で食らいつかせて、日本文学の水準をわずかでも上げるためであった。後進の者は先進の者の仕事を食いつぶして先へ進む。先に引用したように「個性をもつて個性を克服する」「個性の戦争」、それが進歩の源泉であるというのが折口の確信であった。それゆえ折口の弟子教育は、おのれを食らいつかせるための生命がけの営みであった。献身と言ってもよい。それゆえ、中途半端にしか食らいつこうとしない後進の者がいる時、折口はさぞ落胆したに違いない。その悲しみを胸に秘めながら折口は日本文学の魂を感染された者として、個性ある教育者として、その生涯を捧げたのである。

第二章　聖書における霊と言葉

前章において、われらは折口信夫の感染教育論を通して、神霊と歌・呪詞との密接不可分なる関わりを見てきた。これを受けて本章ではキリスト教の正典である聖書を通して神の霊（聖霊）と言葉との関わりを明らかにし、折口の言霊論と類似のあることを見ていきたい。まず本章の典拠である聖書の性格であるが、それは折口が「歌は面白いからではなく、魂を貯蔵できるものと思われて傳承された」というのと酷似しているのである。次に見る通りである。なお聖書の引用における傍線はすべて論者の付したものである。

聖書はすべて神の霊感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。

（テモテへの第二の手紙　三章一六節）

聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである。

（ペテロの第二の手紙一章二〇～二一節）

聖書もまた神の霊によって成り、神の霊のこめられた書物である。「文字は人を殺し、霊は人を生かす」（コリント人への第二の手紙三章六節）という聖句もあるが、聖書において示される「神の顕現」は一貫して「言葉」によってなされている。たとえばモーセが燃えるしばの中で神と出会った時もモーセはただ「私はあってある者」と語る神の声だけに

ふれたのである。預言者エリヤがアハブやイゼベルに命をねらわれて逃避行をして苦境にあった時、神が顕現されてエリヤを救い出すのであるが、その時もただ神の言葉だけが示されたのである。「地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞こえた。エリヤはそれを聞いて……ほら穴の口に立つと、彼に語る声が聞こえた、『エリヤよ、あなたはここで何をしているのか』」（列王紀上一九章一二～一三節）。その他の多くの預言者たちも「ヤハウェの言葉を口に入れられ、それを語らしめられると信じていた」（平出亨『新聖書大辞典』「主の言葉」の項、キリスト新聞社）。神の啓示は、神の言葉を通しての霊的体験であった。新約聖書において、聖書を読むとは、ただ単にその文字にふれるというのではなく、それを書かしめた神の霊にふれることなのである。ヨハネ福音書が冒頭で「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。……この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。」（一章一～二、四節）と語るのも同様の事情によるものである。土戸清が指摘しているように「ヨハネがイエス自身をロゴスとして記述した時、彼の念頭には創世記の冒頭の記事があった。初めに神は天地を創造された。dābarī は混沌に意味と命と光を与えた言葉であって、ヨハネはこれをロゴス（ことば）と言い替えた」のである（『新聖書大辞典』「ことば」の項、キリスト新聞社）。四節の「命」に「霊」とあてはめて読んでも一向に差し支えないと思う。神の霊が人の生かしめる源であることは聖書の根源的信仰である。

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。

（創世記　二章七節）

われわれが、聖書を読んで生かされるのはこの神の生命の霊、神の息吹にふれるからである。これにふれずして客観

的・学問的にいくら聖書を探索してもその本質には達し得ない。われらが聖書を通して神の霊、神の息吹にふれて魂が鼓舞されるのは、折口が次のように言うのと確かに似ている。

○古い歌を口ずさんでゐると、神憑（カミガヽ）りでもした様な氣になる。古人の強い息の力が、われわれの、動悸を昂ぶらせるのである。内容を整理する燻しの力は、氣分として一首の上に働く。内容は如何にともあれ、此が氣分が歌たる力として、われわれに神憑りを現ずるのである。内容も段々改革して行く必要がある。併し更に重大なる氣分を閑却してゐては、爲方がない。我々は、強い息の力に壓せられる様な、萬葉調に、一本氣、はりつめた、鳴りわたる生の力を寓するのである。古語がどうの、内容と形式との交渉がどうのと、空論ばかりする輩の聲などは、壁訴訟として、とりあげないでもよいのである。

（「萬葉調」全集第二七巻　二七一頁）

以上の聖書の本質を押さえた上で、これから個々の聖句をとりあげていきたいと思う。聖書は旧約聖書と新約聖書（以下「旧約」「新約」と称する）との二部によって構成されているのでそれに従っていくこととする。但し、言うまでもないことであるが、以下にとりあげる聖句が「霊と言葉」に関わるすべての聖句ではないことを断っておく。その特徴的、代表的な個所だけをとりあげていくことになる。

第一節　旧約聖書

旧約のはじめ、すなわち聖書のはじめは「はじめに神は天と地とを創造された」（創世記一章一節）という句がおかれている。聖書の神が創造神であることを宣言したものであるが、その創造が「神の言」によって為されていったもの

であることが続く句に示されている。

神は「光あれ」と言われた。すると光があった。……神はまた言われた、「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」。そのようになった。

（創世記一章三、六節）

この言による創造は神の霊力によるものである。但し、人間の創造は多少趣きが違っていて、神が言を発してただちに人が造られたというのでなく、神の手の働きが加わっていることが暗示されている。「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り」（創世記一章二六節）「主なる神は土のちりで人を造り」（同上、二章七節）と言われている。しかしその上で特別に「命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった」（同上、二章七節）のである。ここに人もまた他の被造物と違って霊と言葉との特別な関係の中にある存在であることが示されているのである。ヨブ記にエリフという者の次の言葉が記されている。

しかし人のうちには霊があり、全能者の息が人に悟りを与える。

（三二章八節）

神の霊はわたしを造り、全能者の息はわたしを生かす。

（三三章四節）

いずれにしても神と人との関係が「神の霊と言葉」によって成り立っていることだけをまず押さえておきたい。

さて、以下順に見ていくことにしよう。当該箇所を列挙していく。

○民数記　バラムが神の霊によって語ったということが出ている。

バラムはイスラエルを祝福することが主の心にかなうのを見たので、今度はいつものように行って魔術を求めることをせず、顔を荒野にむけ、目を上げて、イスラエルがそれぞれ部族にしたがって宿営しているのを見た。その時、

神の霊が臨んだので、彼はこの託宣を述べた。「ベオルの子バラムの言葉、目を閉じた人の言葉、神の言葉を聞く者、全能者の幻を見る者、倒れ伏して、目の開かれた者の言葉。（二四章一～四節）

○サムエル記上　サウルと預言者の集団に主の霊がくだって語り出すと言う記事である。

あなたはその所へ行って、町にはいる時、立琴、手鼓、笛、琴を執る人々を先に行かせて、預言しながら高き所から降りてくる一群の預言者に会うでしょう。その時、主の霊があなたの上にもはげしく下って、あなたは彼らと一緒に預言し、変って新しい人となるでしょう。（一〇章五～六節）

サウルが背をかえしてサムエルを離れたとき、神は彼に新しい心を与えられた。これらのしるしは皆その日に起こった。彼らはギベアにきた時、預言者の一群に出会った。そして神の霊が、はげしくサウルの上に下り、彼らのうちにいて預言した。（一〇章九～一〇節）

この預言の霊は後に引用するイザヤやエレミヤなどが受けた霊とは違って、よりエクスタティックな霊であったようで、サウル王の悲劇的結末を暗示しているようである。しかしとにかく霊を受けて預言を語っていくという特徴はあらわれている。サウルになお同様なことが起こったことが一九章二〇、二三節にも記されている。

○サムエル記下　ダビデ王の言葉として次が記されている。

主の霊はわたしによって語る、その言葉はわたしの舌の上にある。（二三章二節）

霊と言葉との直接的な結びつきを示す聖句はとりあえず以上であるが、次はいわゆる後期預言者（イザヤ、エレミヤ、及びそれ以降の預言者たちを指す）たちの預言活動と聖霊との関わりについて見てみる。預言者たちはすべて神の命令

によって預言活動をしていることは言うまでもない。それらを適宜引用していくことにする。まずイザヤ書であるが「その時、主はイザヤに言われた」（七章三節）という類の言葉は枚挙にいとまがない。七章一〇節、八章一節、五節とたてつづけに出てくる。これはエレミヤ書、エゼキエル書その他でも同様である。他に特徴的な箇所だけをいくつか引用してみる。

草は枯れ、花はしぼむ。しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変ることはない。（四〇章一一節）

天を創造してこれをのべ、地とそれに生ずるものをひらき、その上の民に息を与え、その中を歩む者に霊を与えられる。（四二章五節）

わたし（注・神自身）は自分をさして誓った、わたしの口から出た正しい言葉は帰ることがない。（四五章二三節）

あなたがたはわたしに近寄って、これを聞け。わたしは初めから、ひそかに語らなかった。それが成った時から、わたしはそこにいたのだ。いま主なる神は、わたしとその霊とをつかわされた。（四八章一六節）

主は言われる、「わたしが彼らと立てる契約はこれである。あなたの上にあるわが霊、あなたの口においたわが言葉は、今から後とこしえに、あなたの口から、あなたの子らの口から、あなたの子らの子の口から離れることはない」と。（五九章二一節）

エレミヤもまた「主の言葉が臨んで」預言者とせられた者である。「主はみ手を伸べて、わたしの口につけ、主はわたしに言われた、『見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた』」（一章九節）。エレミヤは預言活動をすればするほど周

囲との軋轢を起し預言活動を止めたいと願うほどであったが、一度体内に入った神の言葉がそれをゆるされない。

もしわたしが、「主のことは、重ねて言わない、このうえその名によって語る事はしない」と言えば、主の言葉がわたしの心にあって、燃える火のわが骨のうちに閉じこめられているようで、それを押さえるのに疲れはてて、耐えることができません。

（二〇章九節）

次に**エゼキエル書**であるが、一一章五節に「時に、主の霊がわたしに下って、わたしに言われた、『主はこう言われると言え、イスラエルの家よ、考えてみよ。わたしはあなたがたの心にある事どもを知っている』」とある。そして一番有名な箇所は次のところである。

主の手がわたしに臨み、主はわたしを主の霊にみたして出て行かせ、谷の中にわたしを置かれた。そこには骨が満ちていた。彼はわたしに谷の周囲を行きめぐらせた。見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨があり、皆いたく枯れていた。彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの骨は、生き返ることができるのか」。わたしは答えた、「主なる神よ、あなたはご存じです。」かれはまたわたしに言われた、「これらの骨に預言して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神はこれらの骨にこう言われる。見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。わたしはあなたがたの上に筋を与え、肉を生じさせ、皮でおおい、あなたがたのうちに息を与えて生かす。そこであなたがたはわたしが主であることを悟る」。わたしは、命じられたように預言をしたが、わたしが預言をした時、声があった。見よ、動く音があり、骨と骨が集まって相つらなった。わたしが見ていると、その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおったが、息はその中になかった。時に彼はわたしに言われた。「人の子よ、

息に預言せよ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ」。そこでわたしが命じられたように預言すると、息はこれにはいった。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となった。

（三七章一～一〇節）

ヨエル書では、新約の使徒行伝にも引用されている二章二八～二九節が注目される。

その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしためにも注ぐ。

以上のように、旧約では預言者を中心に神の霊によって言葉が発せられるという信仰の伝統が脈々と受け継がれているのである。

なお霊の継受と言うことで興味深い記事がある。これは感染というのではなく意識的な授受なのであるが、師から弟子へ霊の授受が行われたという出来事である。預言者エリヤの死期が近づき地上を去ろうとする時、弟子のエリシャがエリヤに霊の継受を求め、ついにそれを得たという出来事が列王紀下に記されている。これによってエリシャは名実ともに預言者として立っていくことになったのである。

彼らが渡ったとき、エリヤはエリシャに言った、「わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい」。エリシャは言った、「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」。エリヤは言った、「あなたはむずかしい事を求める。あなたがもし、私が取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見ないならば、そのようにはならない」。彼らが進みながら語っていた時、火の車と

火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつむじ風に乗って天にのぼった。エリシャはこれを見て「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、再び彼を見なかった。そこでエリシャは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、またエリヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言い、彼が水を打つと、水は左右に分かれたので、エリシャは渡った。エリコにいる預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言った。（二章九～一五節）

折口が弟子に臨んだのもこういうことではなかったか。エリヤ・エリシャの間では「言葉」の介在ではなく「外套」がその役割を果たすのであるが、その結末が神の言葉を語る預言者としての自立であれば、構造は同じということになろう。

第二節　新約聖書

新約聖書では、キリストを通しての神の霊という面と、教会を通しての神の霊、キリストの霊という面が強く打ち出されてくる。

まず四福音書（**マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ**）であるが、ここではキリストを通して語る神の霊が示される。

イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはとのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があって言った。「これはわたしの愛する子、わたしの心

にかなう者である。」

（マタイ福音書　三章一六～一七節）

彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である。

（同右、一〇章一九～二〇節）

人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。

（ヨハネ福音書　六章六三節）

このヨハネ福音書のキリストの言葉は、霊と言葉と命の一体性を示していて重要である。さらにキリストは地上を去った後も「真理の御霊」が降下して弟子たちに臨み、真理に導き、語らせると預言する。これがやがて教会の設立となるペンテコステ（聖霊降臨）の出来事となるのである。

けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。

（同右、一六章一三節）

ところでキリストの誕生、説教、働き等を含めた全存在が「聖霊」によって導かれている。われらがキリスト教信仰を持つとは、このキリストを通して聖霊にあずかる者となるということなのである。

ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として、迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。

（マタイ福音書　一章二〇～二一節）

それからイエスは御霊の力に満ちあふれてガリラヤへ帰られると、そのうわさがその地方全体にひろまった。……すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、「主の御霊がわたしに宿っている。

（ルカ福音書　四章一四節、一七～一八節）

神がおつかわしになったかた（注・キリスト）は、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。

（ヨハネ福音書　三章三四節）

イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった。「聖霊を受けよ。」

（同右、二〇章二一～二二節）

最後の聖句が示しているように、キリストが弟子たちに伝えたかった最大のものが「聖霊」である。これも感染とは言えないが、やはり霊の授受がキリスト教教育の根底になくてはならないことを示唆している。

次に教会を通しての聖霊の授受の記事に移る。ここでは使徒行伝を中心に取り上げ、他に二～三の書簡を引用する。

使徒行伝は教会の設立とその発展を述べている書物であるがそのすべてに「聖霊」が深くかかわっている。

五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然激しい風が吹いてきたような音が天から起こってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが炎のように分かれて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。

（二章一～四節）

このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。それでイエスは神の右に上げ

られ、父からの約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである。（二章三二～三三節）

悔い改めなさい。そしてあなたがたひとりびとりが罪の許しを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。（二章三八節）

彼らが祈り終えると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した。（四章三一節）

聖霊によってキリスト教集団（教会）が形成され、語る言葉を持ち始めたのである。キリスト者は聖霊を受けてこそ語り得るのである。このことをより明確に示す出来事があったことが次の記事に見えている。

アポロがコリントにいた時、パウロは奥地をとおってエペソにきた。そして、ある弟子たちに出会って、彼らに「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と訪ねたところ、「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と答えた。「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼がきくと、彼らは「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」と答えた。そこでパウロが言った、「ヨハネは悔改めのバプテスマを授けたが、それによって、自分の後に来るかた、すなわち、イエスを信じるように、人々に勧めたのである」。人々はこれを聞いて、主イエスの名によるバプテスマを受けた。そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した。その人たちはみんなで一二人ほどであった。（一九章一～七節）

「主イエスの名によるバプテスマを受ける」ことと「聖霊を受ける」ことと「異言や預言を語る」ことが一つとされ

ている。キリストの名によるバプテスマ（洗礼）→聖霊拝受→信仰の言葉という構造、特に後二者の構造は折口の感染教育と近似している。但し、これは次章で述べることになるが、折口の場合は信仰の言葉（歌・咒詞）→聖霊授受という逆の順序も強く意識しており、キリスト教もこれに学ぶことがあると思う。

使徒行伝には初の殉教者ステパノの記事も記されている。この人物は立派な説教をし、それがもとで殺されることになるのであるが、その紹介に「信仰と聖霊に満ちた人」（六章五節）「彼は知恵と聖霊とで語っていた」（同、一〇節）とあるのが興味深い。

なおついでながら、初代教会の「感染」力がいかにつよいものであったか、それを示している次の言葉を紹介しておこう。これは大祭司アナニヤが弁護人テルトロを通してパウロを訴え出た時のテルトロの言葉の一部である。

さて、この男は、疫病のような人間で、世界中の全てのユダヤ人の中に騒ぎを起こしている者であり……。

（二四章五節）

「疫病」という表現の中にパウロ及び初代教会の影響力・感染力の強さをうかがい知ることが出来る。

ローマ人への手紙では、神の霊みずからが祈りの言葉を導いてくれるとの記述が見える。

御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。

（八章二六～二七節）

コリント人への第一の手紙では、聖霊の働きについての指摘があり、霊と信仰告白・言葉との密接なる関わりを証ししている。

そこであなたがたに言っておくが、神の霊によって語るものはだれも「イエスはのろわれよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない。霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務めは種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れをたまわっているのは、全体の益になるためである。すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ言葉によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には、力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が与えられている。すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。

（一二章三～一一節）

この霊の賜物が現前する場が「教会」である。これにつづく聖句（同、一二～二七節）がそれを教えている。

最後の聖句引用となる。**ペテロの第一の手紙**である。キリストによる救いに関わって、預言者とキリストの霊・聖霊について述べられている。

この救いについては、あなた方に対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした

時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。

（一章一〇～一二節）

聖書に示されている、神霊と言葉との関係についてはとりあえず以上の通りである。キリスト教もまた、聖霊の授受ということがなければ、信仰（者）は生起せず、言葉も発せられないのである。すでに再三指摘したように折口の感染教育論と酷似した関係にあることは認めざるを得ないであろう。問題は、折口の主張を参考にしながら、キリスト教がどのような教育論を発展し得るかということである。それについての私見を次章で述べることとする。

第三章　キリスト教教育の課題

折口の感染教育論と、聖書における霊と言葉との関係を見てきて、今われらはキリスト教教育に関して何をいうべきであろうか。一口にキリスト教教育といってもそれが行われる場によって方法も手段も異なることは言うまでもない。教会では何よりも信仰の伝達が優先され、礼拝や聖書研究（会）などがその伝達の場となる。しかし学校では知識教育を通しての伝達ということにならざるを得ないし、授業・講義・ゼミナールというのがその伝達の場である。このために綿密なカリキュラムも要求される。また一方、家庭では生活を共にしながらの教育であって、生活習慣・しつけとい

った要素を色濃く持った教育である。言わず語らず、自然に親の生き方・言葉が子に伝えられていく教育であって、折口の感染教育を一番実践しやすい場であるかもしれない。

第一節　聖霊の授受としてのキリスト教教育

このような事情を踏まえつつ、敢てまとめとなることを言うとすれば次のようなことになるであろうか。まずキリスト教教育の目的であるが、それは「信仰の伝達及び信仰者の育成」である。これ以外にない。もちろん論者もこれに付随する多くの要素の重要なることを認識している。キリスト教的文化を身につける、キリスト教的知識・教養を身につける、キリスト教の思想・歴史等を正しく理解させる等々。しかしそれらはあくまで二次的教育要素であって、第一の目的はやはり信仰の伝達・信仰者の育成である。そうでなければ本論の主旨である「神霊」の出番が無くなってくる。知識・文化等の伝達は人の努力でなし得るが、信仰の伝達は神霊によらずしてどうにもならない。信仰の伝達とキリスト教の教育とが一体であるのはキリストご自身の命令によるのである。

あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを、守るように教えよ。（マタイ福音書　二八章一九～二〇節）

すなわち、すべての人をキリストの弟子化させること、これがキリスト教教育の目的であり、これがゆらいでいるところでは一切のキリスト教教育は成り立たない。

以上に基づいてキリスト教教育の課題を述べるとすれば、その第一は、キリスト教教育の内容は「聖霊の授受」だと

いうことである。キリスト者たる教育者は何を被教育者に望むのか。それはかつて自分が受け、そして今それによって生かされている聖霊を譲り渡すことである。これさえ彼が受け継いでくれれば、あとは本人の力でどうにでもなる。しかしこれが成らないときは、どんなにキリスト教の教理や知識、また文化にふれてもそれらは彼を生かす力にはならない。それらはいつでも脱ぎ捨てられる上着のようなものでしかない。「キリストを着る」という表現が聖書にあるが、それは決して脱ぎ捨てられる衣服のようなものではない。それは私たちの皮膚にまでなるということである。それは神の霊・キリストの霊を身に受けるということ以外ではあり得ない。そのことをわれらはすでに第二章でつぶさに見てきたのである。次の聖句も参考のために引用しておく。

すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち神の子である。あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることを証しして下さる。

（ローマ人への手紙　八章十四～十六節）

論者は日本の教会に身を置く者として、私たちの伝道にも教育にも「霊の継受」ということが意識されることが少なかったことを告白せざるを得ない。もちろん「聖霊体験」を重視する教会もあるにはあるが、それは一人一人が直接神との関係における神秘的な霊体験をするのであって、人から人への霊の授受というのとは異なっている。

私たちキリスト者は皆、バプテスマにおいて聖霊を受けた者である。しかしそこへ至る過程においても先人から何らかのスピリット（霊）を受け、感動してキリスト者となる決断へと至ったのではないだろうか。その時の感動・決断は

先人の中にある「霊」にふれたということである。われらがよくいう「聖霊のお導き」とは単なる比喩的表現ではなく、事実をそのまま表わしているのである。そして先人すなわち伝達者、教育者の中にある神霊の現臨の在り方、それこそがその先人の個性であって、折口の言う「影響の強さ」を証しするのである。私個人の経験からしてもそうであったし、キリスト者のほとんどがそのような霊的個性にふれて後につづく者となったのである。教会もキリスト教学校も、そしてクリスチャンホームも、もっと霊の継受に心すべきであろう。**コリント人への第一の手紙**に次のような記事がある。

全員が預言しているところに、不信者か初心者がはいってきたら、彼の良心はみんなの者に責められ、みんなの者にさばかれ、その心の秘密があばかれ、その結果、ひれ伏して神を拝み、「まことに、神があなたのうちにいます」と告白するに至るであろう。

（一四章二四～二五節）

これが神の霊にふれて信仰告白するに至った実例である。教会及びあらゆるキリスト教的集会の見本とすべき例である。折口が心血をそそいでなそうとした「感染教育」を私たちもキリスト教の意味において全力で取り組むべきであると思う。

第二節　聖霊の授受の方法論

方法論と題してはみたが、「霊」に関わることであるから、計算の成り立つ自明な方法などあるはずはない。折口の感染教育も「教育的意図を有せざる」教育である。成り行きに成算の立つ教育ではない。しかし一つ明言できることがある。それは本論の主旨である「言葉を通しての霊の授受」ということである。折口の場合はそれが、歌であり、咒詞

であった。

ではわれわれの霊的言語とは何であろうか。それは言うまでもなく、第一義的に聖書であり、第二義的には聖書に基づいた説教（奨励・証詞・講義）、祈禱、讃美歌等である。それゆえ教育者は、聖書を朗読する時、それを解釈して説教・講義をする時、祈る時、讃美歌を歌う時、それらすべてに聖霊がこめられるように祈り願いつつなすべきである。避けなければならないのは、聖書の棒読み、知識だけの文献学的なだけの聖書解釈、心のこもらない形式的な祈り文句、ただ美しいだけの讃美歌、等である。キリスト教学校ではもちろんキリスト教科目だけが講ぜられるのでなく、一般科目が多数教授せられる。しかしそこにおいてもキリスト者教師であるならば、その講義に聖霊の教導あることを祈ってその業につくべきである。キリストの弟子たちが祈るすべをキリストに教えを乞うた時、キリストは有名な「主の祈り」を教えたあと、このように告げたのである。「求めよ、そうすれば見いだすであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。……このようにあなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来るものに聖霊を下さらないことがあろうか」（ルカによる福音書一一章九～一三節）。キリスト者教師はすべからく、まず自己に与えられている聖霊の臨在を固く信じ、感謝した上で、その力によって教育の業を行なうべく、また、この己れにある霊を被教育者に分与するべく、満身に祈りをこめてその業にたずさわるのである。当然失敗や挫折もあろう。しかしその祈りをこめた霊的教育をなすなかで、聖霊の教導があった時、必ずや教師にあった霊は、被教育者に伝達されることであろう。その時キリスト教教育は成就する。これが本論の結論である。

以下、少し周辺的なことにふれて終わる。まず第一は聖書の翻訳である。われらは日本語を通して神の言葉を聞くのである。とすれば、その翻訳された聖書の日本語に神の霊が宿っていなければならない。といってもどういう翻訳が神霊のこもったものであるかを判別するのはむずかしい。しかし聖書翻訳の現状から言えることは、私見では、現在教会で使用されている三種類の聖書よりは、公にはすでに使用を中止されている文語訳のものの方が断然良いのではないかということである。詩篇二三篇一～四節の四種の翻訳を列挙してみる。

エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野に伏させ、いこいの汀にともなひたまふ。エホバはわが霊魂（たましひ）を活かし、御名のゆえをもて正しき路にみちびきたまふ。たとひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害（わざわひ）をおそれじ。なんぢ我と共に在せばなり。（文語訳）

主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。たといわたしは死の蔭の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。（口語訳）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の蔭の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私と共におられますから。（新改訳）

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ　憩いの水のほとりに伴い　魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく　わたしを正しい道に導かれる。死の蔭の谷を行くときも　わたし

は災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。（新共同訳）

どの訳をとるかは、読者それぞれの性向があることを認めざるを得ないが、論者には神霊の宿りを感じさせるのはやはり文語訳である。何といっても聖書はキリスト教教育の中心に位置するものであるから、その翻訳には相当な心ばえが必要である。論者は現在使用されている口語訳、新改訳、新共同訳に深甚な危惧を感じている者である。

第二は、説教・講義や祈り、讃美歌といった信仰者の発する言語の問題である。言語はそれぞれの民族の歴史と伝統を背負った文化遺産である。われわれキリスト者が説教し、祈るときも日本語の制約を逃れ出ることは決してできない。であるならば、その日本語に聖書の神の霊力を宿らせねばならない。そうでなければ、キリスト教の霊力が日本語それ自体が持っている伝統の力に負けてしまって信仰は伝達され得ない。キリスト教の伝達者、教育者は、高等なる日本語の習錬とそれに聖書を宿らせる信仰の訓練に同時に励んでいなければならない。この点においてキリスト教教師はやはり欠けがあるように思えてならない。それは論者自身の自戒の念でもある。キリストの霊のこもった説教・講義をなし得ていない。聖霊に導かれた祈りや賛美となっていない。しかもそれぞれ日本語としても未熟である。折口が心血を注いだ歌には五・七・五・七・七という定型リズムがある。しかし説教はもちろん、祈りや讃美歌にはそれがない。型に頼れない以上、それぞれが独自のキリスト教的日本語を生み出す以外にない。

カトリック教会や聖公会などでは定まった形式による『祈禱書』を用いて祈る。我々プロテスタント教会のような各自の恣意的な祈りではない。それゆえ確かに整えられた美しい祈禱文であり、信仰的・神学的にも祈られるべき事柄が過不足なくきちんと祈られている。これに学ぶ点は多い。しかし我々の伝統であるいわゆる自由祈禱では、その祈禱者

の信仰の個性がより良くあらわされ、その霊的にじかにふれることができる。定型文の良さを十分学びつつ、我々はそれぞれの個性と責任において、新たなキリスト教的日本語を生み出していく以外にない。その点で論者が参考にしているのが夭折のキリスト教詩人八木重吉である。彼の、信仰をベースにした日本語感覚は我々にとって大きな参考である。彼の詩をまず三篇紹介する。

○

固有名詞に惚れた男

×

ヨルダンの河

ヨルダン河

ヨル――ダン――いいな！

×

ラザロ

×

レバノンの香柏

×

マリア――マグダレナ

×

ナルドの油

○

鳩　キリスト　マグダラのマリヤ

海岸　風の無い晴れた朝

朝の雀　芽　太陽

○

小さき花　完全な鏡

フランシスはいい名をみんな奪ってしまった

これらの詩群にはそれまでの日本語の世界にはなかった新しい言霊が、宿っているように論者には感じられるのである。そして彼は次のようにも歌っている。

○

芭蕉のようになるな
人麿のようになるな
きりすとだけがただしい

この確信に至るまでの日本語の修錬とキリストへの信従が我々に求められている。わが国では明治期以来「和魂洋才」ということが言われている。これをもじって言えば、我々の進むべき道は「洋魂和才」である。折口はある時期「歌の圓寂する時」を書いて短歌滅亡論を唱えたことがあった。これについて詳述するいとまはない。しかし我々も心しなければいつの日か日本のキリスト教も終焉を迎えるかもしれない。我々の言葉に力が無いのである。我々の説教や講義には、キリスト教思想やその意味内容についての説明というものが多過ぎて「きゆつと握りしめると水になって手の股から消えてしまふ」ようなものが無さすぎるのかもしれない。もっと歌や物語のような、折口の言葉で言えば「神が日本人の耳へ口をあてゝ告げた話」のような、語りが必要ということかもしれない。「意味が訣っても、訣らなくとも、神の語は音樂として人の胸に泌む」ような語りが。この意味で物語風の説教も見直すべきであるかもしれない。また、その意味ではやはり文語訳の聖書・讃美歌も必要である。意味がわかる、わからないは二次的問題である。我々は生命がけで新しいキリスト教的言語・日本語の創造に取り組まなければならない。最後に八木重吉の詩をもう一篇引用して本論を閉じる。我々への警告としたい。

聖　霊

聖書が聖霊を活かすのではない
聖霊が聖書を生かすのだ
まず聖霊を信ぜん
聖書に解しがたきところあらば
まず聖霊にきかん
聖書のみに依る信仰はあやうし！
われ今にしてこれをしる　おそきかな

（完）

［引用文献］

折口信夫全集（中公文庫版、中央公論社　一九七五年～一九七六年）
岡野弘彦「折口信夫の記」（『文学界』一九九五年六月号～一九九六年五月号）
山本健吉全集第四巻（講談社　一九八四年）
聖書　口語訳（日本聖書協会　一九六二年）

定本　八木重吉詩集　（彌生書房　一九五九年）

［参考文献］

前田護郎　『ことばと聖書』（岩波書店　一九六三年）

戸田義雄　『宗教と言語』（大明堂　一九七五年）

島薗進・鶴岡賀雄篇『宗教のことば』（大明堂　一九九三年）

藤原藤雄　『聖書の和訳と文体論』（キリスト新聞社　一九七四年）

関根文之助『聖書のことばと日本語』（福永書店　一九八二年）

『ことば読本　やまとことば』（河出書房新社　一九八九年）

『ことば読本　定型の魔力』（河出書房新社　一九九二年）

ルーテル学院大学神学セミナー篇『福音とニホン語』（キリスト教視聴覚センター　一九九六年）

金田一春彦『日本語の特質』（日本放送出版協会　一九九一年）

山下秀雄『日本のことばとこころ』（講談社　一九八六年）

豊田国夫『日本人の言霊思想』（講談社　一九八〇年）

川村　湊『言霊と他界』（講談社　一九九〇年）

津城寛文『折口信夫の鎮魂論』（春秋社　一九九〇年）